

氏 名	黄 敏
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（言語コミュニケーション文化）
学 位 記 番 号	甲言第13号（文部科学省への報告番号甲第486号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2013年7月31日
学 位 論 文 題 目	“Wonder. Go on and Wonder”: Quentin's Tragedy from the Sociological Perspective
論文審査委員	（主査）教授 杉 山 直 人 （副査）教授 大 高 博 美 教授 田 村 和 彦 名誉教授 小 山 敏 夫

## 論文内容の要旨

本論文“‘WONDER, GO ON AND WONDER’: QUENTIN’S TRAGEDY FROM THE SOCIOLOGICAL PERSPECTIVE’は、ウィリアム・フォークナー（1897～1962）の初期主要作品のひとつ、『響きと怒り』に登場する青年主人公クエンティン・コンプソンの自殺原因を社会学的観点から探求し、まずは彼の死が「南部社会」とどうかかわるかを明らかにしたのち、次に後期作品に姿をみせる若き主人公たちと南部社会との関わりが、クエンティンとの比較でどのような変化をみせるかを解明しようとする試みである。

“Introduction”と“Conclusion”を含めて全7章から構成される本論文を、以下各章毎に紹介する。

「イントロダクション」は大きく二分される。処女作『兵士への給与』（1926）から遺作『自動車泥棒』（1962）に至るまで、20編の小説を後世に残したフォークナーの代表作をふたつだけ挙げるとすると、『響きと怒り』と『アブサロム、アブサロム！』になるのは衆目の一致するところであろう。どちらの作品でも大きな役割を果たすクエンティンをめぐる定石通りの先行研究紹介が、「イントロダクション」前半を占める。そのなかで注目すべきは、黄敏氏が登場人物としてのクエンティンをめぐる多様な「解釈」のなかで、彼の自殺をめぐる考察が、ややもすれば等閑視されてきた事実を指摘するのを忘れないことである。本論文の狙いと意義が冒頭部で確認されているのがわかる。

後半では、クエンティンの死を考える際の批評的視野をいくつか提供する社会学的知見や発見が語られる。本論文第一章以下の展開にさいし、黄敏氏が特に注目しているのは「自殺は、個人がその一部となっている社会集団と、どれほど統合できているか、その統合程度と反比例する」というフランス人社会学者 Emile Durkheim が自著 *Suicide* で語った結論である。この結論に基づき、黄敏氏は「社会的、集合的生活と個人の行動とのあいだに存在する関係を例証、説明する」ことの重要性に言及するのである。

第1章“A Destiny Mapped Out”の焦点はローザとクエンティンに当てられている。自殺をめぐる Emile のセオリーに解説されている「個人とその個人とが所属する共同体（社会）との関連」を念頭に置きながら、ローザとクエンティンのふたりが南部とどう関わったのかについて、黄敏氏は議論を展開する。彼らが共通して自らの生活基盤としているのは、もちろんミシシッピ州ジェファーソンがその典型である19世紀、それも特に南北戦争敗戦後の深南部社会である。1845年に生まれ、小説開始時の1910年には65歳になった老女とハー

ヴァード大学進学直前のクエンティンとのあいだには、ほとんど半世紀に及ぶ年齢差が存在する。だが、ふたりが背負うこうした時間的背景をめぐる差異にもかかわらず、彼らはともに南部社会が構成員に求めるコードを満足させることによって、それぞれ理想の「南部女性」と「南部紳士」たらんとして失敗し、結局は南部社会の犠牲者とならざるをえなかった、と黄敏氏は論じる。個人を抑圧する力として社会という制度がもつ悪しき影響力である。

第2章“The Black Shadow”はクエンティンの黒人観を探る。高い教育を受け、深南部から北部のエリート校たるハーヴァードで学ぶだけの力量を備えた知的エリートたるクエンティンではあるが、しかし彼は旧態依然として「ラバにのった黒んぼ」に象徴されるような南部の差別的で古めかしい人種意識に支配されている。そのため大切な成長期に、クエンティンにとって「母」としての精神的役割を果たしてくれた可能性のあったディルシーとも疎遠な関係しか結べなかったことを、黄敏氏は力説する。次に後半部では、こうした人種意識に支配されたクエンティンが『響きと怒り』との関連において『アブサロム、アブサロム！』で、サトベン一族と南部についてどのような理解を得るに至ったかが論じられる。

第3章“The Dungeon of Parenthood”本章において黄敏氏は、アンテ・ベラム（南北戦争以前の旧）小説に多く見られる、「家庭の崩壊と両親を失った子供たち」というモチーフが、クエンティンが置かれた具体的状況にどのように展開されているかを精査する。家庭を軸にして「社会と個人」の関係をとらえようとする試みである。クエンティンの自殺とコンプソン家の「問題」をめぐるのは、多くの批評家が母キャロラインへの批判を繰り返してきた。「利己的で冷たく愛情を欠く」というのが代表的なものである。本章で黄敏氏が試みるのは、すでに陳腐化したこうしたキャロラインへの再批判ではない。そうではなくて、コンプソン氏とクエンティンとの関係を掘り下げようとするのである。人生のスタートラインに立ちながら母という助言者を失ったクエンティンにとっては、父の助言こそが彼を破滅から救う可能性を秘めていたが、肝心のコンプソン氏が長男に与えたものは人生での努力を否定する虚無的人生観、女性不信、さらには自分自身やクエンティンが担うべき「伝統継承」そのものを否定する態度であった。このように母ばかりでなく、クエンティンは父から委ねられた「負の遺産」をも継承する羽目となったのである。

第4章“The Last Human Bond”はキャディとクエンティンとのかかわりを扱った章である。社会学者 Jack D. Douglas の解説を引用しながら、黄敏氏はキャディこそがクエンティンと唯ひとり心を通い合わせることができた人物、彼の「意思疎通への欲求」を充たしてくれた存在だった、と評価する。クエンティンにとってキャディが持つ、こうした根源的価値を力説する黄敏氏からみれば、キャディの処女喪失をめぐり、ドールトン・エイムズにたいして「南部男性」としてしかるべき態度と行動をとれなかったことから生じた敗北感が、クエン自殺の要因とする従来からの有力解釈のひとつは、かならずしも妥当性をもつものではない。むしろ黄敏氏は、キャディの結婚がクエンティンにもたらした深刻な喪失感に注目している。

第5章“The Tragic End and Beyond”は初期作品を離れて中後期作品における青年主人公たちを主に扱う。彼らとクエンティンを比較することで、「社会と個人」をめぐるどのような思想的変化が作家のなかに起こったかを論じようとするのである。アイク・マッキャスリン（『行け、モーセ』、1942）からチック・マリソン（『墓地への侵入者』、1948）を経て、『自動車泥棒』に姿を見せるルーシャス・プリーストにいたる3人は、それぞれの作品でジェファーソンや広く南部社会と摩擦や衝突を引き起こす。もっとも南部と若者たちを見つめるフォークナーのまなざしは穏やかで、初期作品に見られた深刻で解決困難な社会と個人との軋轢は徐々に弱まってゆく。避けられない双方のギャップを描くときも、フォークナーは歳月の流れとともに肯定的な姿勢をとるようになる。家族の誰とも意思疎通を図れず、最終的に死を選ぶしかなかったクエンティンのケースと比較しても、たとえばルーシャスを取り巻く彼の血筋の人びとは、若い彼を気遣って心を通い合わせ「伝統継承」や「社会への適応」を伝えることができるのである。最晩年のフォークナーは「社会」との距離に苦しむ青年たちの悲劇を描くよりは、社会のあり方を肯定する青年像を好むようになっていた。

## 論文審査結果の要旨

内容以前に、まずは達者な「英語」を挙げるべきだろう。用いられる語彙レベル、微妙な表現、リズムにのった文章の流れなど、黄敏氏の優れた英語運用能力がうかがえる。ときにフォークナーばりの長文に陥るために読みづらいこともあるが、全体的にはバランスのとれた筆遣いとなっており、分量的にも全体では260ページの力作である。

先行批評紹介が充実していることも指摘しておきたい。フォークナー関係の研究書は現時点で数百冊を優に越えている。だから批評意見の取舍選択にも研究者の見識が問われることになる。この点でも黄敏氏は気配りを忘れず、バランスがとれている。フォークナー批評が本格化した1960年代初頭から現在に至るまで、Warren, Brooks, Backman といった比較的初期のものから、数年前に発表されたばかりの Joiner や Weinstein、さらには初期研究の段階で評価を受け、そののち最近になって再度あたらしい角度から知見を披露している McHaney や Irwin の研究書までも含めて紹介するなど、幅広い文献案内が準備されている。

豊富な先行研究を咀嚼したことで、黄敏氏の議論は狭くひとりの青年主人公の「死」をめぐる議論に限定されるのではなく、南部作家としてのフォークナー世界の広がりを持示することに成功している。空間軸と時間軸とが黄敏氏の議論の枠組み形成をになっている。コンプソン家という「家庭」、その家庭を内包するジェファソンという「町」、さらにはふたつを大きく包み込むミシシッピ州といったように、横軸として南部の空間を拡大させることによって、氏の議論は最終的には作家を育んだ南部社会のエートスを読者に感じとらせることに成功している。空間軸と交差するのは縦の時間軸である。1929年の『響きと怒り』をめぐる議論からはじまった本論文は、最終的には『自動車泥棒』で終わるわけで、時間的にも30年以上の隔たりがある。

30年以上に及ぶ創作活動のなかで、フォークナーが「南部」に注ぎつづけた「まなざし」には変化が見られ、その変化はなによりも若き主人公たちの姿に映し出されている、というのが黄敏氏の結論であることは「内容の要旨」で紹介したとおりである。

「社会と個人」とのかかわりを考察するという氏の基本姿勢は、社会学者 Emile Durkheim ばかりでなく、ほかにも補助的に Steve Taylor や Jean Baechler らの見解紹介によっても補強されている。一般論として、文学作品をめぐる議論展開の立脚点を社会学的見地に求めることについては、あるいは異論があるやも知れない。しかし、深南部の歴史や文化的背景を考えると、こうしたアプローチはけっして妥当性を欠くものではない。19世紀前半には最大輸出品目だった綿花輸出によってアメリカに外貨をもたらした、のちのアメリカ経済発展の基盤形成に貢献した深南部は、南北戦争によってすべてを失い、アメリカの「後進地域」というレッテルを甘受せねばならなかった。深南部のこうした歴史を抜きにしては、コンプソン氏の虚無主義と、それがクエンティンに与えた影響を理解することは難しいだろう。社会学的視角を黄敏氏が選択したことは賢明である。

クエンティンに死を選ばせることになった家庭、町、南部社会との軋轢を浮かびあがらせる際、黄敏氏はテキストへの細やかな配慮を忘れない。議論展開の大枠は社会学に求めながらも、議論を「つめる」ための手続きは、あくまでテキストの丁寧な読みによるのである。

第1章でローザとクエンティンが「ダブル」の関係にある、という議論をとってみよう。黄敏氏によれば、それぞれ社会の模範をめざす「南部女性」と「南部紳士」たらんとして失敗したふたりは、ともに南部社会から「周辺化」された犠牲者となっている、という。この議論を成立させるため、黄敏氏が社会学的な大枠に頼っているのは当然なのだが、同時にテキスト分析に基づいた丁寧な論旨展開が見られる。たとえばジェファソン出発を控えたクエンティンにローザが語りかける言葉（テキスト9～10）をめぐる分析がそうである。クエンティンは彼女の言葉を受け止められず、理解できないままである。だが、もしもクエンティン

が彼女の「真意」を理解するだけの共感的な心を、この時点で備えていたとすれば、自らの分身の悲劇を大局的に我がこととして受け止め、そうすることによって将来に備えることもできていたかもしれないのに、というのが黄敏氏の示唆するところである。この例にあるように、小説そのものとは直接関係しない、他の学問分野から導入した大枠アプローチを、テキスト解釈で補強するという正攻法が本論文には浸透している。これが本論文を読み応えのあるものに仕上げた一因なのである。

うえのローザ・コールドフィールドの場合もそうだが、黄敏氏の議論で興味深いことのひとつは、クエンティンとかかわりをもつ数人の女性との関係に細やかな注意が払われることである。評者は特にキャディとクエンティンをめぐる議論に関心をもった。子供たちよりも「家意識」や「格式」にとらわれたキャロラインが、当然果たすべき母親としての役割をクエンティンに果たしてやることができず、また先に触れた「レイシスト」的意識を払拭できないために、黒人である乳母ディルシーとのあいだにもクエンティンが相互交流が望めないなか、妹キャディのみが、クエンティンが理解と愛情を求めることができた唯一人の女性だった。

クエンティンの死にキャディがどう関わっているかを解釈する際、『響きと怒り』の出版後15年を経てフォークナー自身が執筆した「付録」を議論の基に据える有力批評家が過去には多かったし、現在にいたっても少なくない。「キャディの処女性にこそ、コンプソンの名誉（南部の名誉）」がかかっている、それを守ってやるができなかった自らの無力が、大きな打撃をクエンティンに与えた、とするものである。なんといっても作家自身が「解説」したわけで、議論を進めるために有効な指標となったせいもあり、Peter Swiggart, Melvin Backman, Brooks といった批評家はおおむね「付録」にヒントを得た議論を展開してきた。

黄敏氏が提供する視点は微妙に異なる。「愛する者を突然喪失することが自殺を引き起こす原因となる」という社会学者 Douglas の見解を支持する氏は、この説明がキャディとクエンティンのケースに「ほとんど完璧に適合する」(177) と論じる。Douglas によれば、ふたりの人間のあいだに強い「一体化」(identification) が存在した場合、残された一方を「他になにも考えられなくなるような、すべてを包み込む」ほどの喪失感が襲うことになり、これこそまさにクエンティンの置かれた立場そのものである、と黄敏氏は論じる。示唆に富んだ指摘であろう。というのも、フォークナーの解説にしたがって（単純化すると）「南部の名誉」を守れなかったことがクエンティンの命を奪った、という説明だけでは前途有為な青年の不可解な行動を、多くの読者は納得しにくいからである。自殺をめぐる Douglas の考えに基づいて構築された黄敏氏のキャディ像には、ひとりの人間としての彼女の豊かな個性を読者に印象づけるだけの説得性が備わっている。ややもすれば抽象的解説に陥りがちなキャディ論を越えることができた本論第4章には、議論のアプローチにオリジナリティが認められ、キャディの結婚がクエンティンにとって耐えがたい苦しみだったことを、改めて確認しておくだけの価値があることを読者に伝えるのに成功しているのである。

第4章と比べると、実質終章となる第5章は議論がやや上滑りした印象を与えそうである。本章ではクエンティン以後の青年主人公たちが3人登場するわけだが、議論の焦点を黄敏氏が絞りかねているように見えるからである。ヨクナパトーファ・サガの一部となっても、登場する主人公たちが活躍する作品は、言うまでもなくそれぞれ独立した小説世界を形づくっていて、クエンティンと彼らを「社会と個人」という論点から結び合わせようとしても、それぞれの作品世界がもつ完結性が邪魔をしている、と感じられる場合がある。もっと多くの説明と論旨のかみ合わせが求められる、という印象を与えるのである。複数の作品群をひとつの論点から統合的議論の対象とするさいに生起する難しさである。そうした難しさをもっとも感じさせるのは、『自動車泥棒』の主人公ルーシャス・プリーストとクエンティンとを比較して論じたあたりであろう。

設定された時代背景から言えば、『響きと怒り』も『自動車泥棒』もさほど変わらない。おなじように20世紀の曲がり角を越えた頃である。ところが、ふたりの青年主人公を取り巻く家庭のあり方、ジェファーソンという共同体と彼らとの関係、さらに同じように深南部を離れて旅をしても、旅の経験を経たふたりを待



ち受ける結果は、まったく異なる。クウェンタン・コンブソンが異境の地にあって孤立し、相互理解はおろか、心を通いあわすことを可能とする人間関係さえも築けなかったのとは対照的に、ルーシャスは「教養小説」の主人公にも似て周囲の人びとからの影響を受けて成長し、同時に人びとを幸せに導く手助けを果たすことになる。『響きと怒り』における「社会と個人」の関係が孤立と緊張、相互不信とニヒリズムに満ちていたのとは正反対に、『自動車泥棒』には思いやりと相互理解に基づく人間関係の網が張りめぐらされているのに読者は気づかされる。

時代の動静と作品世界の結末とのあいだに生まれる、ちぐはぐな逆ベクトルはまだある。『自動車泥棒』はフォークナー最晩年の作品であり、時代はまさに公民権運動の高揚を迎えようとしていた。南部の社会的混乱は、いよいよ本番を迎えようとしていたのである。だが、そのような混沌を20世紀後半のアメリカ社会にもたらす素地となった、南北戦争後の深南部を描いたにもかかわらず、『自動車泥棒』には深刻で救いたい社会的軋轢と摩擦がほとんど感じとれない。死の直前1962年にフォークナーの筆から生まれ出た半世紀前の深南部には人種の緊張もなければ、南北戦争敗戦後の社会的混乱が生み出した殺伐とした時代風土も感じとれない。たとえ感じられたとしても、そうした困難は善意の人びとの努力によって乗り越えられることが語られるわけである。深南部が産んだこのノーベル賞作家は、「社会と個人」の関係について、半世紀前の深刻な問題意識に囚われることから解放され、ふるさとを肯定したいという願望にみたされていた。

作家の内面世界に起きたこうした変化について、黄敏氏は無理には深入りした解釈を加えないまま「事実」を指摘するに留めている、というべきであろう。そこに評者は一抹の物足りなさを感じないわけではない。だが、最晩年のフォークナーがどのような内的経験を経て、20世紀を迎えたばかりの深南部を肯定するようになったのか、それを解き明かすことは容易なことではあるまい。ノーベル賞受賞後の作家は社会とのかかわりについて、自らの影響力をめぐって配慮することが多くなる。知名人となった自らの地位にたいする自信と安らぎも働いていたかもしれない。研究者に可能なのは、作品の分析ではあっても、すべてを解釈し尽くせる神のごとき視点ではない。そのように考えると、黄敏氏がクエンティンからスタートした「社会と個人」のありようをめぐる議論を、ルーシャスの「楽しい旅と経験」を指摘することで締めくくったのは、まずは妥当とすべきであろう。

最初にも書いたとおり、ハイレベルの英文で書かれた本論文は260ページの大部なものである。読みほぐすのに時間が必要な箇所もかなりあるが、そのために論文としての価値が損なわれるものではない。逆に外国語である英語を巧みに使いこなした黄敏氏の研究者としての高い能力と素質をうかがわせる。

黄敏氏の論文を慎重に審査し、7月13日に実施した口頭試問の結果をも併せて協議した審査員4名は、氏の論文が博士（言語コミュニケーション文化）の学位を授与するにふさわしいと判断するに至り、ここに報告するものである。